集積回路　　その2

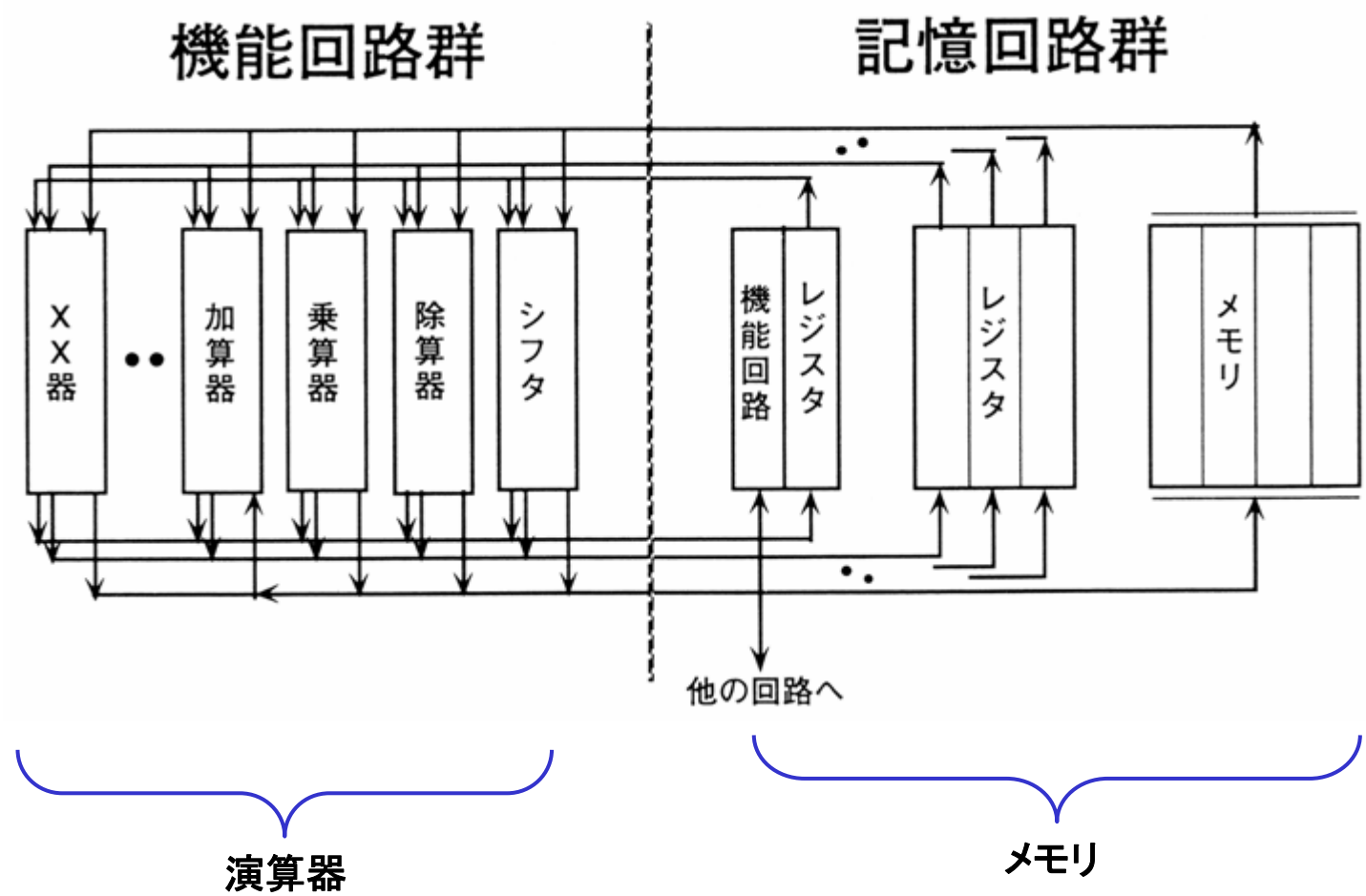
電子物理工学専攻
松澤　昭

松澤研究室ホームページにいろいろな資料があります。
http://www.ssc.pe.titech.ac.jp

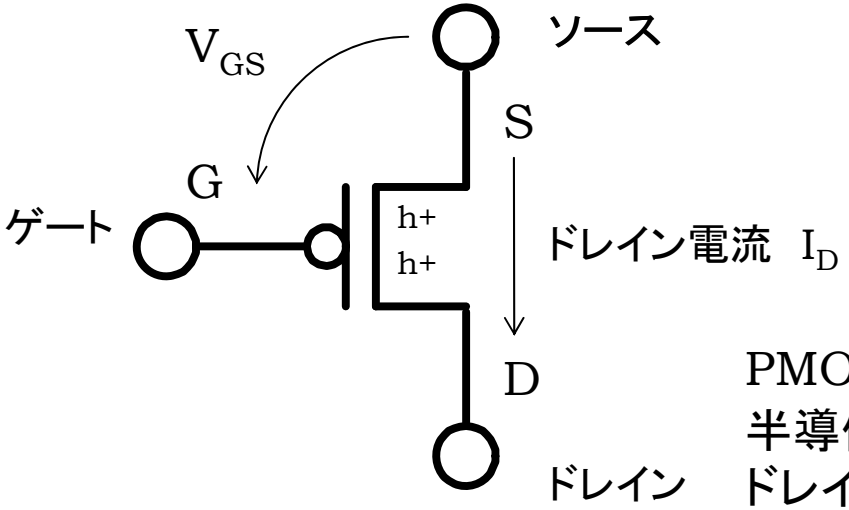
論理回路
デジタル回路

デジタルシステムの基本構成

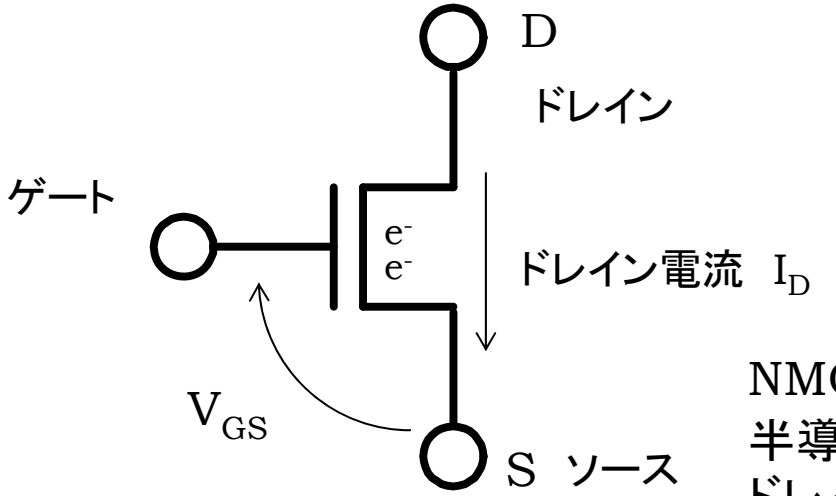
集積回路では殆どの演算や処理がデジタル回路で行われる。
デジタル回路は論理回路とメモリ回路からなる。



NMOSとPMOS



PMOSはソースに対してゲートに負の電圧をかけると
半導体中に正の電荷を持つホールが誘起されて
ドレイン電流が流れる

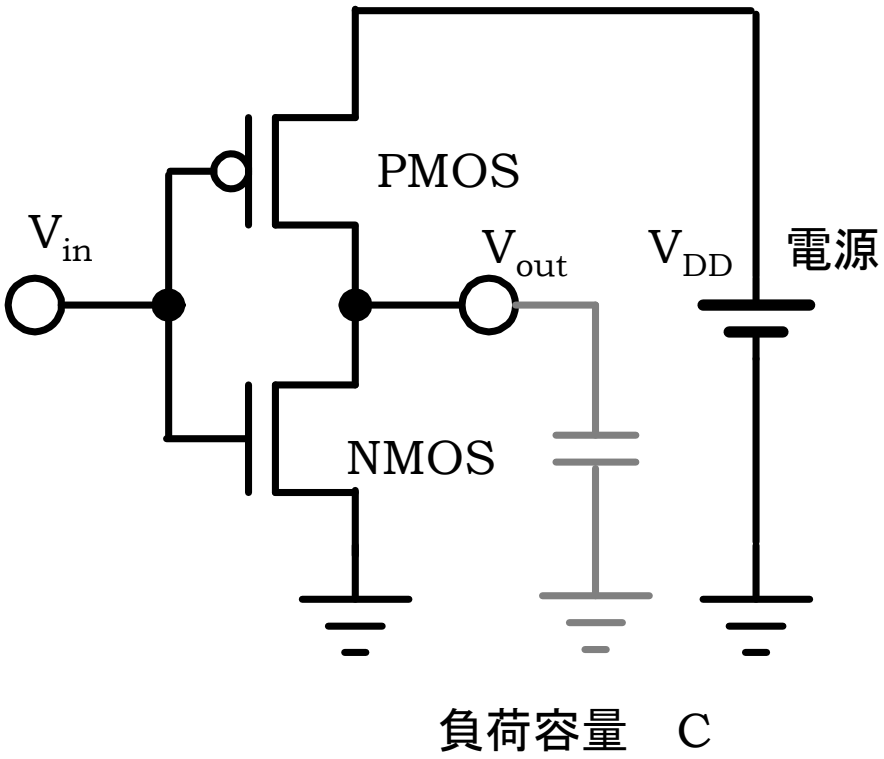


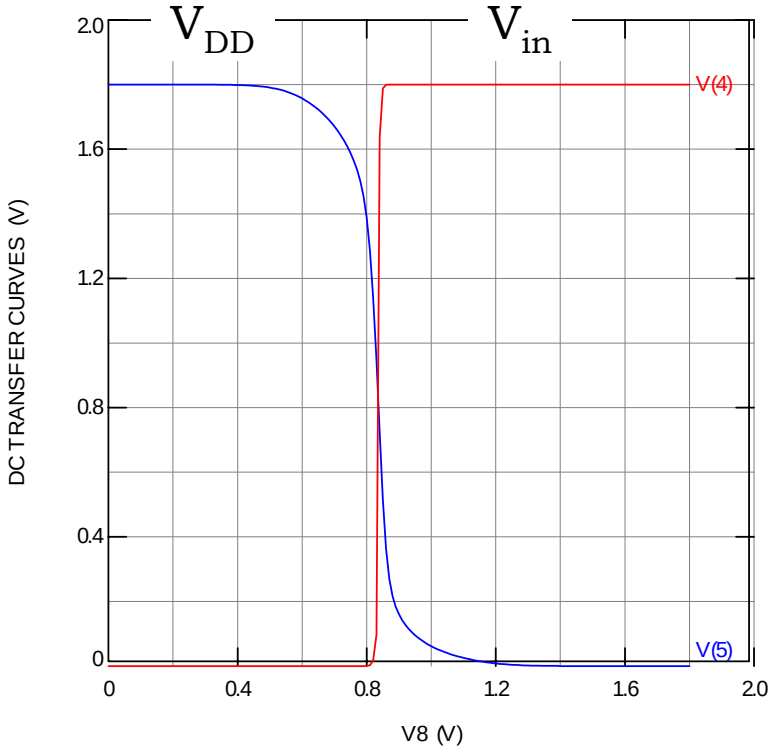
NMOSはソースに対してゲートに負の電圧をかけると
半導体中に負の電荷を持つ電子が誘起されて
ドレイン電流が流れる

CMOS回路

V_{in}が低いときはPMOSがオン,NMOSがオフとなりV_{out}はV_{DD}まで上がる
V_{in}が高いときはNMOSがオン, PMOSがオフとなりV_{out}は接地レベルまで下がる

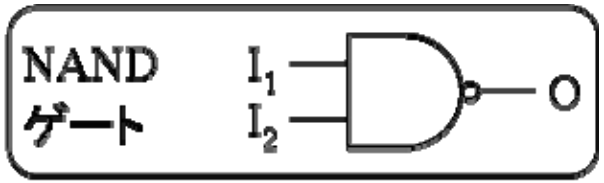
PMOSとNMOSが両方ともオンになることは無いようになっている



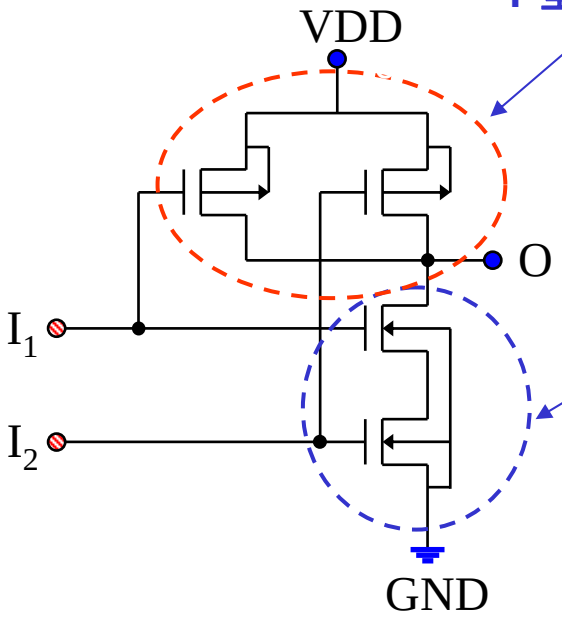


トランジスタ・回路・レイアウト

論理回路はP型MOSトランジスタとN型MOSトランジスタを形成し、これを金属で配線することで実現される。トランジスタの形成と配線はパターンを描き（レイアウト）これをマスクでレジスト（写真のフィルムのようなもの）を塗布した半導体基板に転写することで実現される。

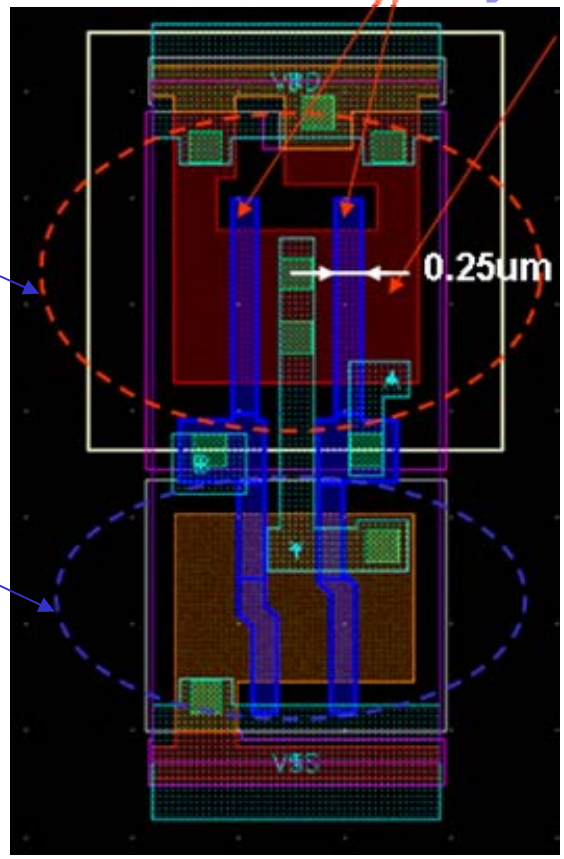


（1）論理図



P型MOSトランジスタ

N型MOSトランジスタ



トランジスタ回路図

インバータ

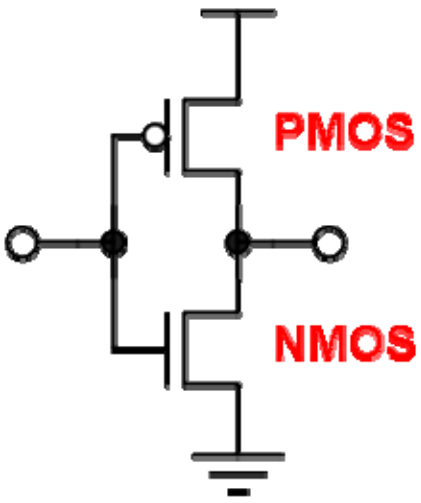
NMOSトランジスタとPMOSトランジスタを組み合わせることで論理回路が実現できる

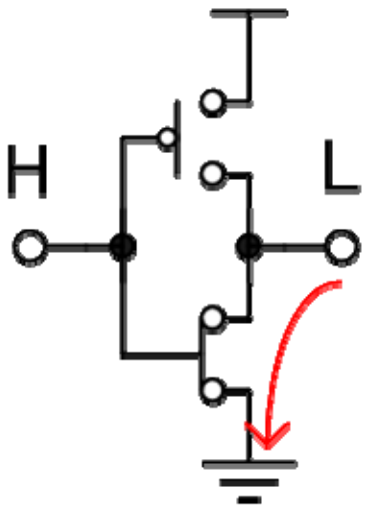
NOT (否定) | $\overline{X}$ | X ▷○ $\overline{X}$

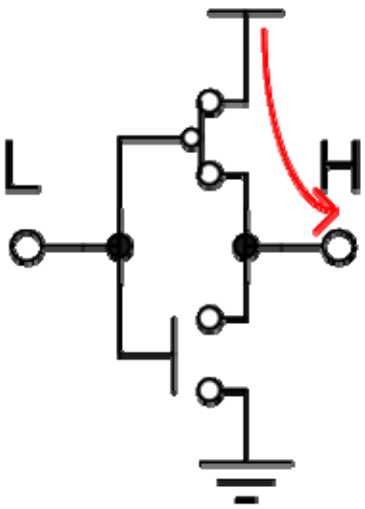
入力A	出力Y
0	1
1	0

否定（NOT）回路は、LSI設計ではインバータ（反転）と呼ばれる。

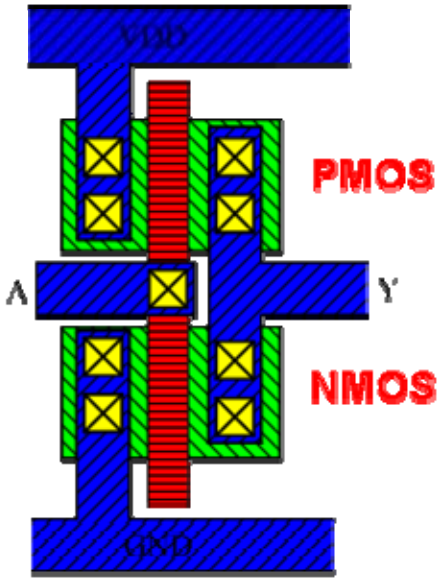
デジタル信号では、2値は0と1しかないので、入力が0なら1となり、入力が1なら出力は0となる反転となる。







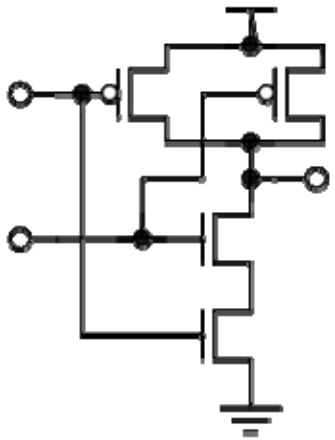
レイアウト

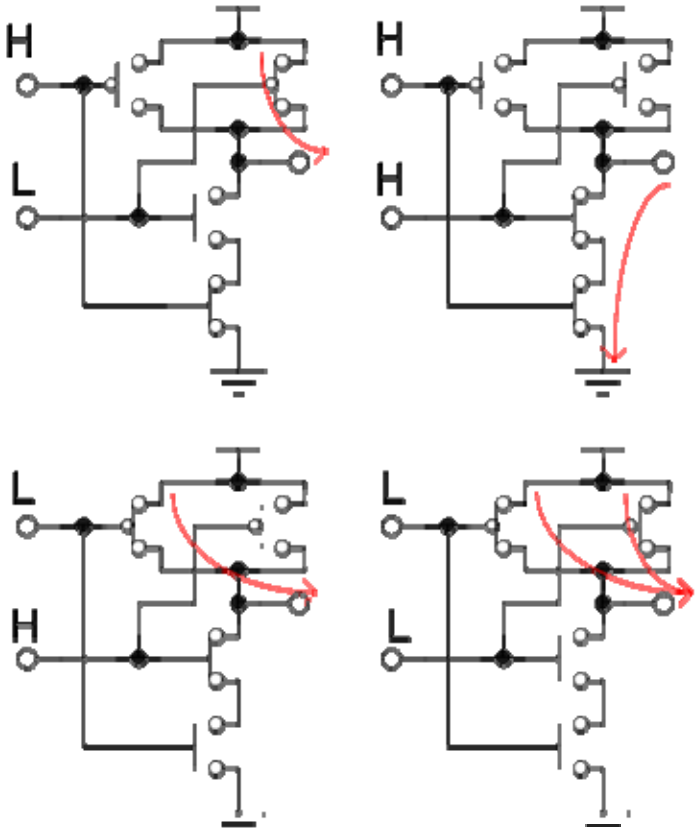


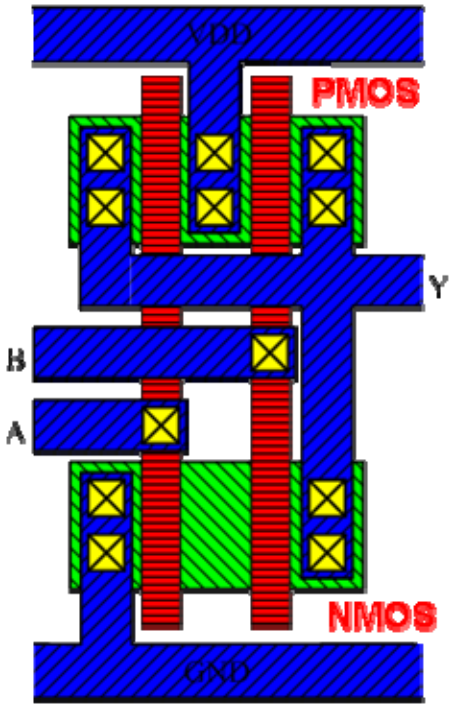
NANDゲート

NANDゲートはNOT－ANDゲートの意味をもつ。すなわちANDの否定機能をもつ論理ゲートである。入力A,Bの入力に対しての出力Yの論理式は $Y = \overline{A \cdot B}$ となる。

入力		出力
A	B	Y
0	0	1
0	1	1
1	0	1
1	1	0





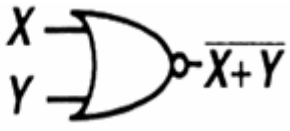


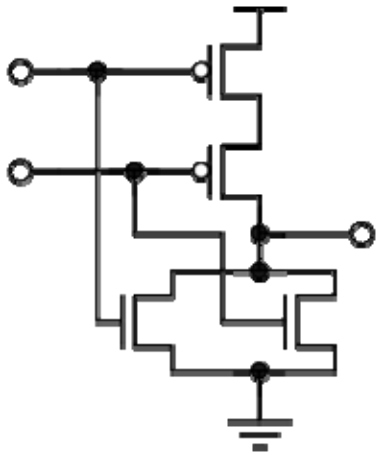
NORゲート

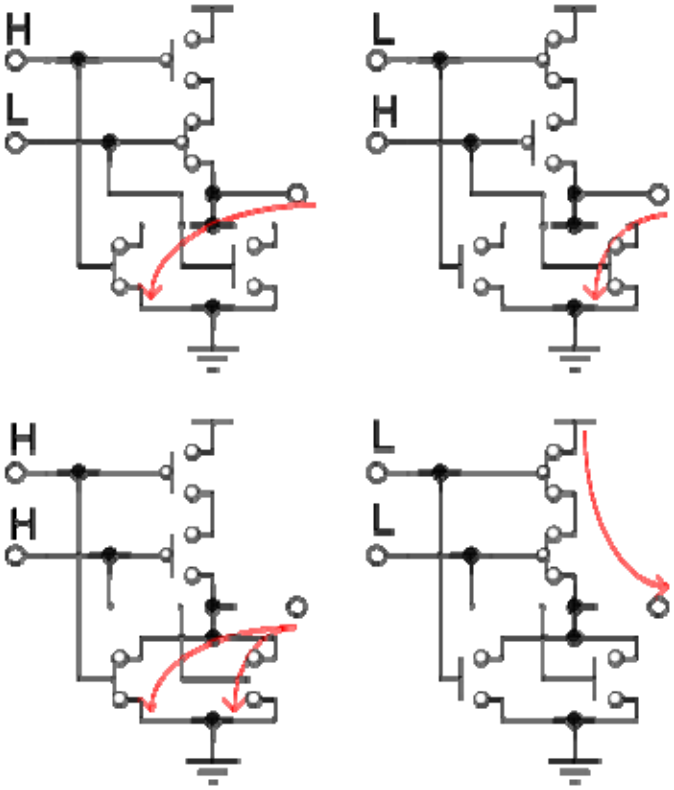
NORゲートはNOT－ORゲートの意味をもつ。すなわちORの否定機能をもつ論理ゲートである。入力A,Bの入力に対しての出力Yの論理式は $Y = \overline{A+B}$ となる。

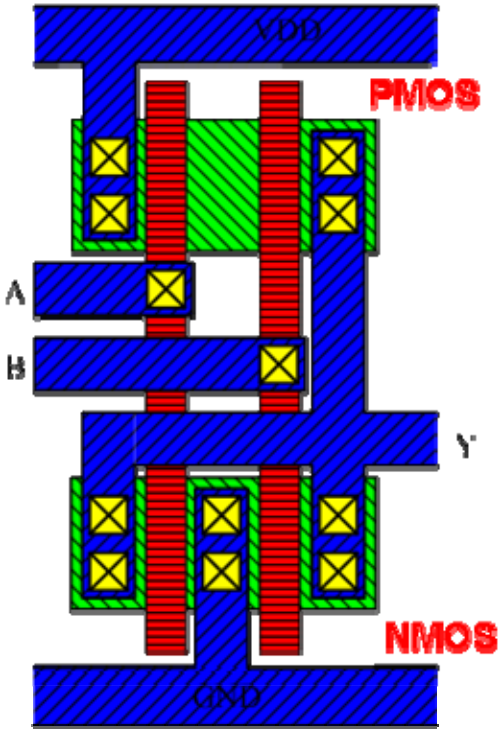
入力		出力
A	B	Y
0	0	1
0	1	0
1	0	0
1	1	0

NOR | $\overline{X+Y}$

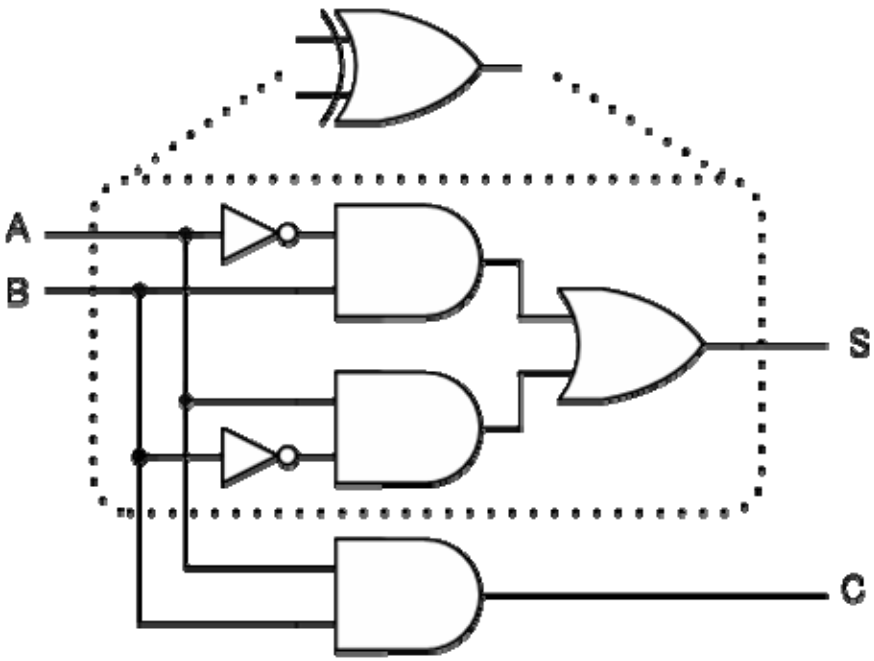








加算器（ハーフアダー）

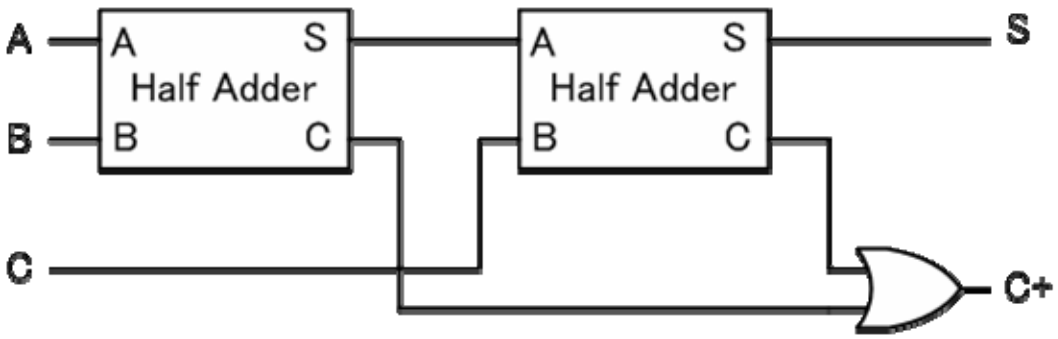


デジタル回路（2進数）での足し算機能を持った回路を加算器と呼ぶ。加算器には下位からの桁上げを考えない半加算器と、下位からの桁上げを加算していく全加算器とがある。

入力		出力	
A	B	S	C
0	0	0	0
0	1	1	0
1	0	1	0
1	1	0	1

A	0	0	1	1
+ B	+ 0	+ 1	+ 0	+ 1
C S	0	1	1	1 0

加算器（フルアダー）



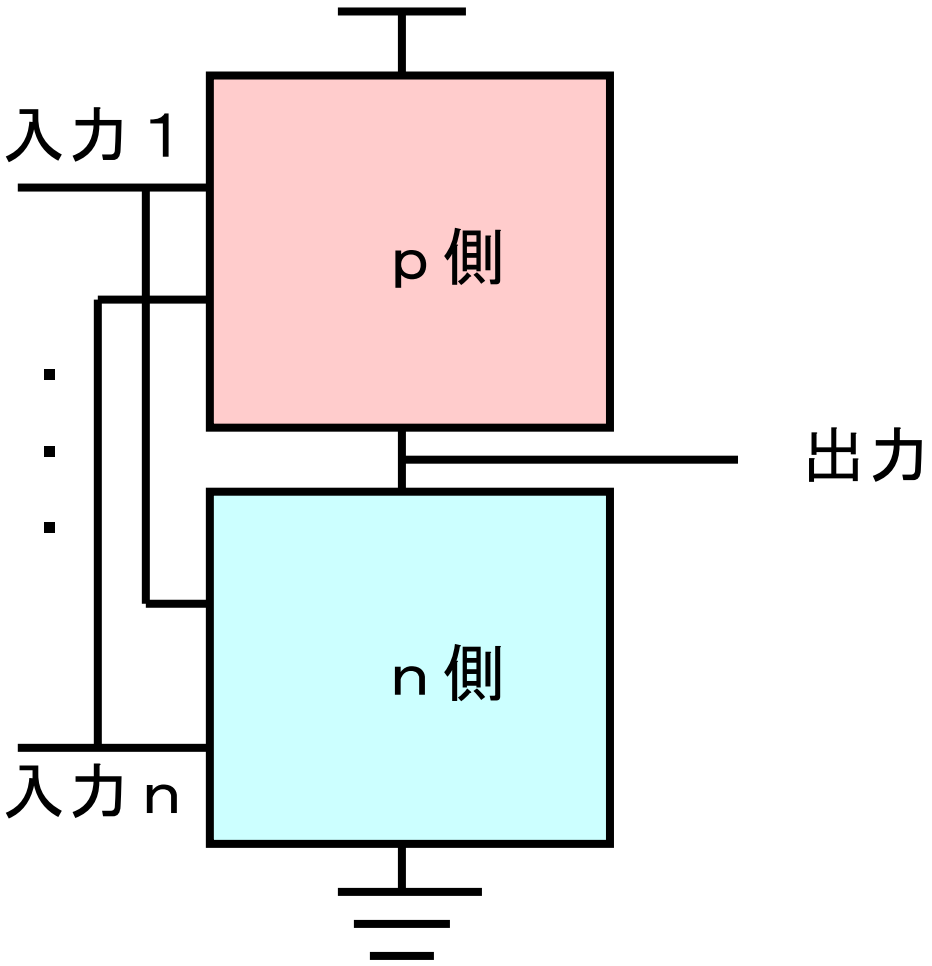
	A		0		0		0		0
	B		0		0		1		1
+	C	+	0	+	1	+	0	+	1
C+	S		0		1		1	1	0

			1		1		1		1
			0		0		1		1
		+	0	+	1	+	0	+	1
			1	1	0	1	0	1	1

入力			出力	
A	B	C	S	C_+
0	0	0	0	0
0	0	1	1	0
0	1	0	1	0
0	1	1	0	1
1	0	0	1	0
1	0	1	0	1
1	1	0	0	1
1	1	1	1	1

CMOS論理回路

CMOS論理回路はP型とN型が互いに双対な回路により実現される。

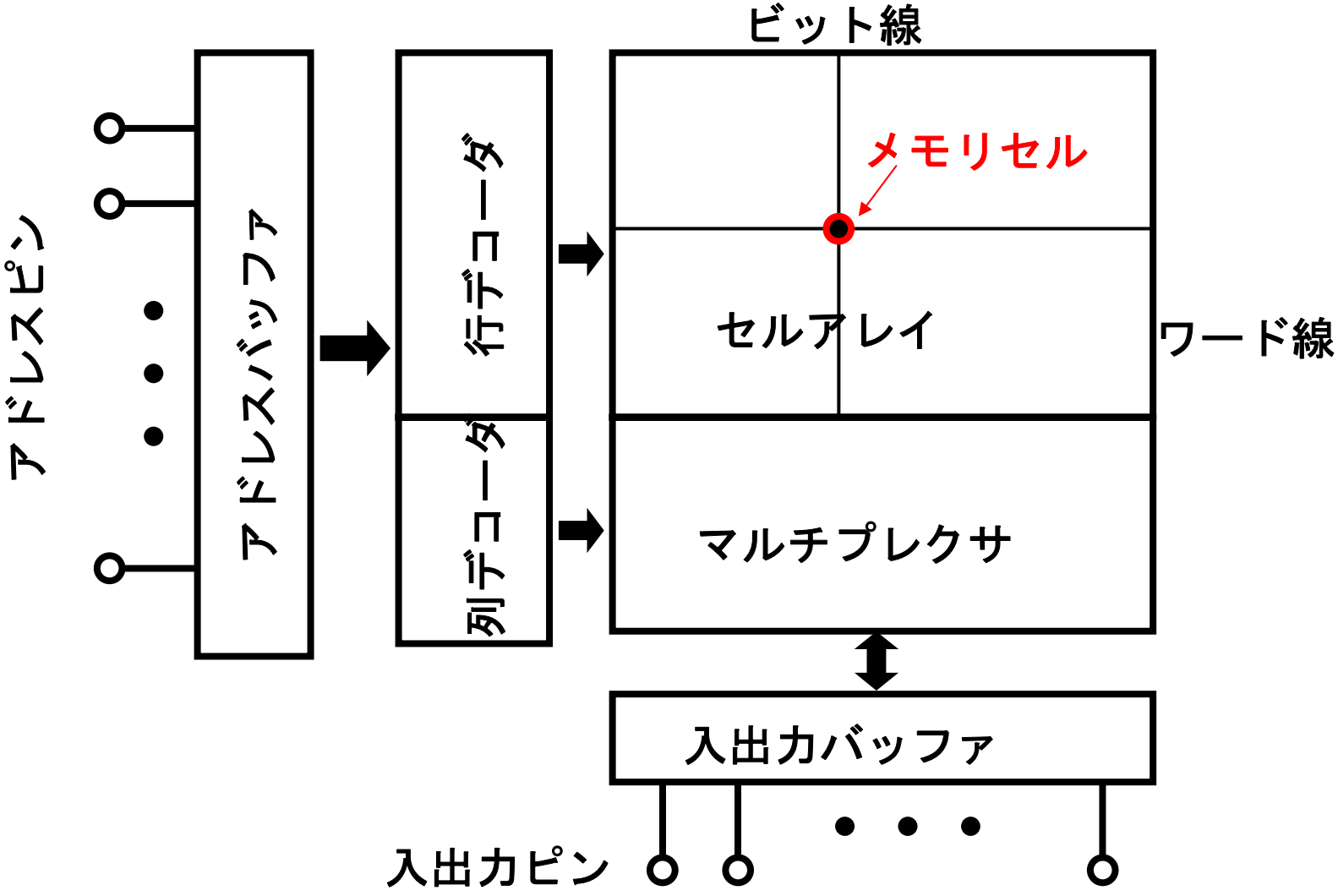


ｐ側
　and: 並列
　or: 直列
ｎ側
　and: 直列
　or: 並列
互いに双対な回路
出力は否定

メモリ

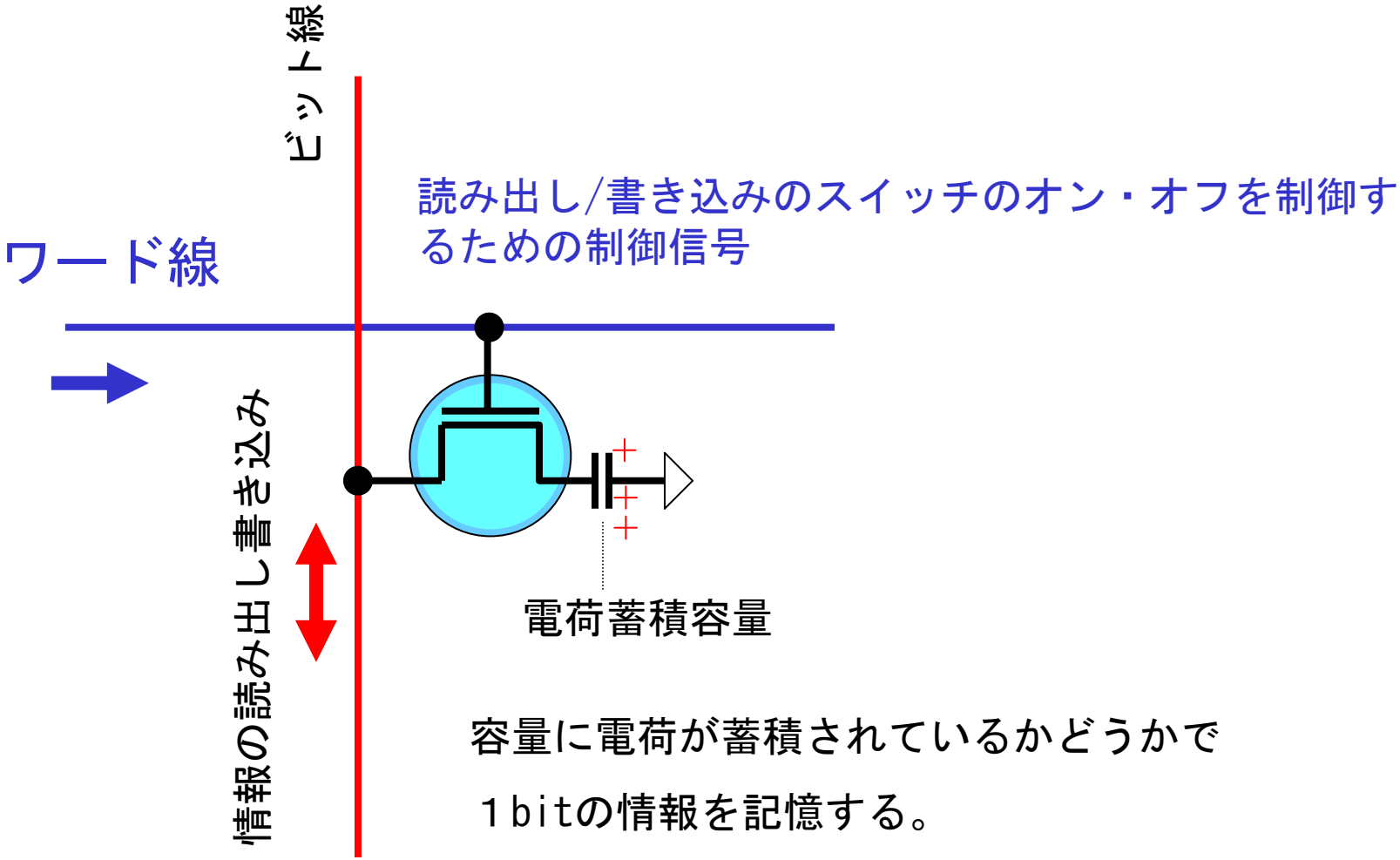
メモリの構成

メモリ中の特定データはx, yのアドレスの交点で選択される



DRAMの記憶原理とメモリセル

DRAMは微少な容量に電荷を蓄えるか否かで1, 0を記憶する。

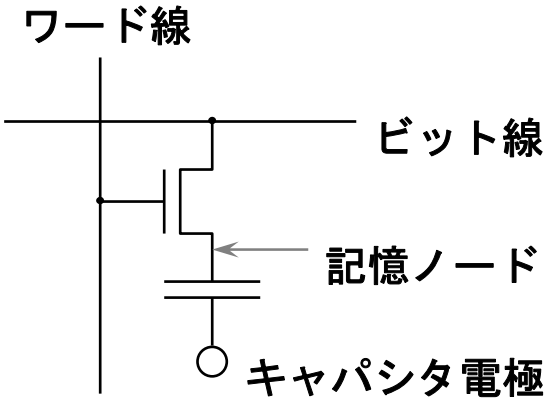


容量に電荷が蓄積されているかどうかで

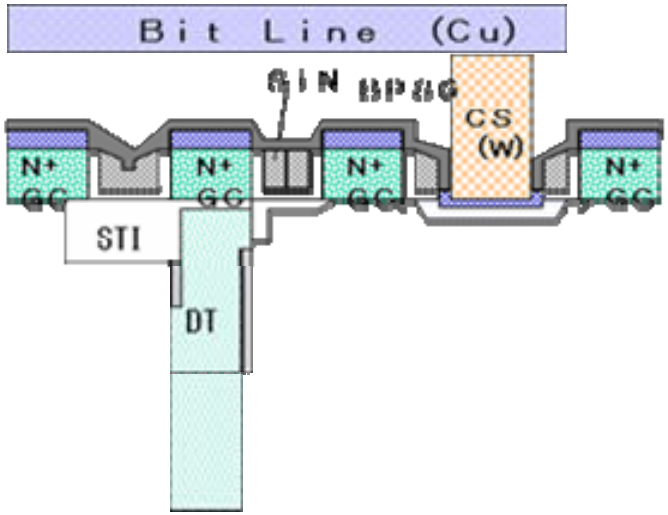
１bitの情報を記憶する。

1-Transistor 1-Capacitor Cell

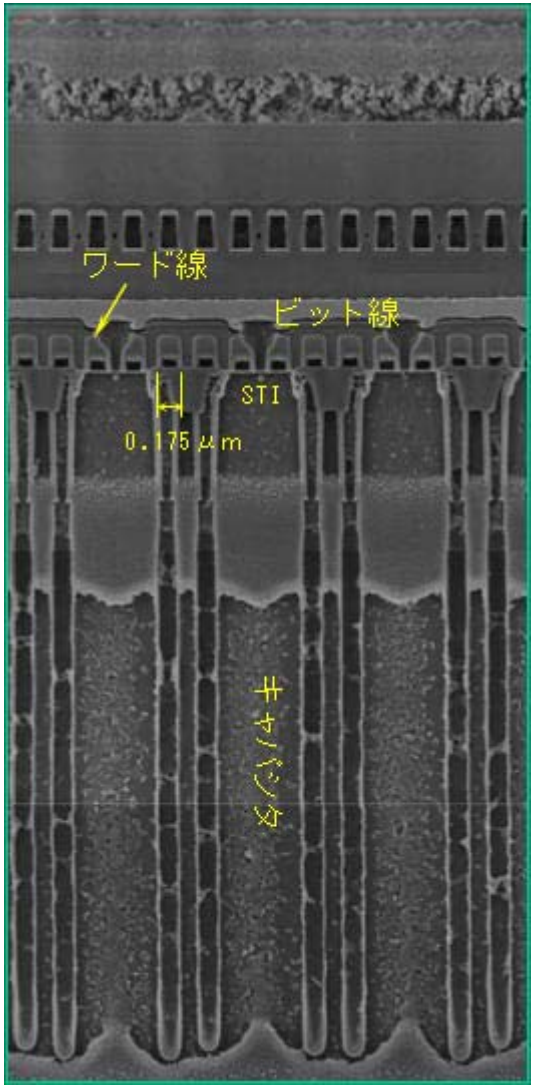
等価回路



断面図

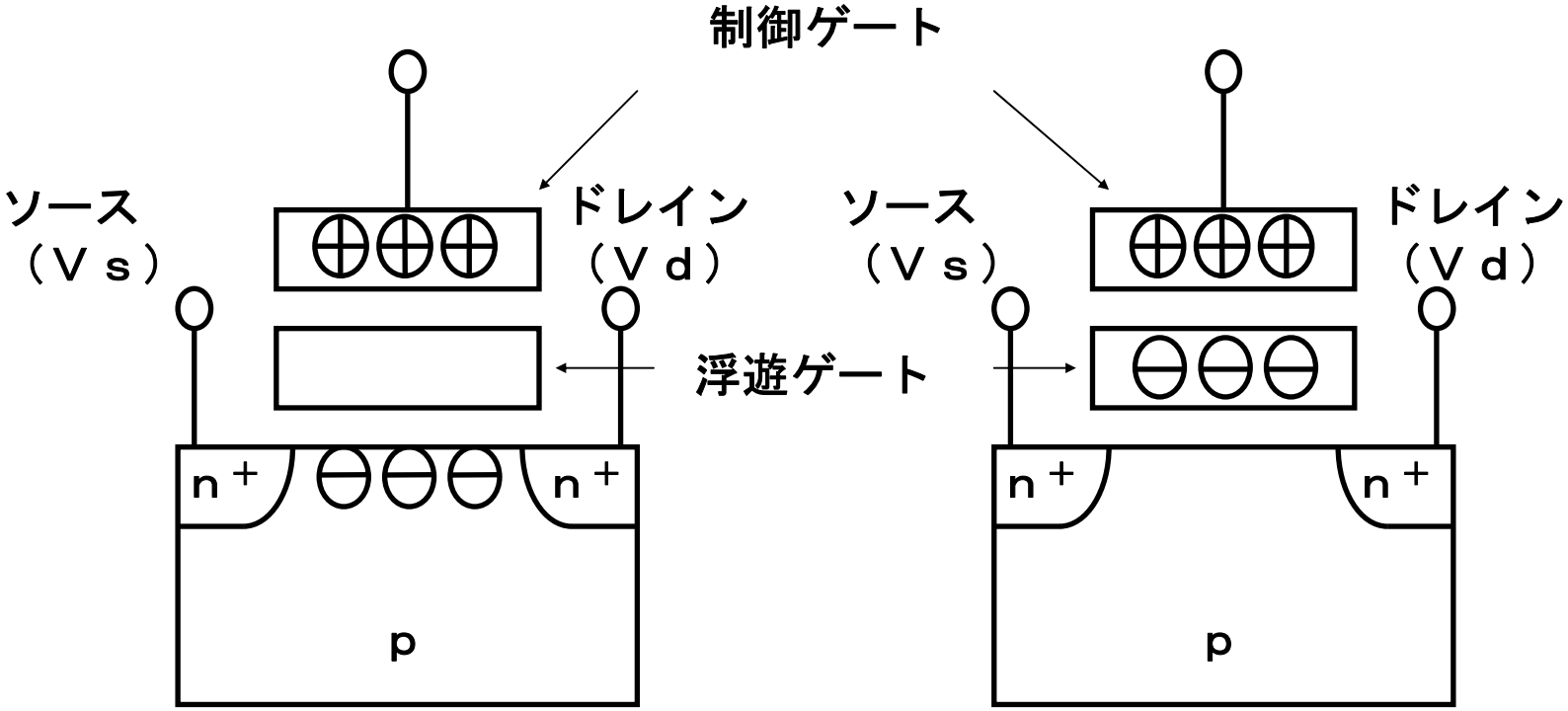


0.175μm　256M DRAM



不揮発性メモリ

不揮発性メモリはゲートとチャネル間に浮遊ゲートを設け、この浮遊ゲートに電子を保持することにより、データを保持するものである。電源を切ってもデータは保存される。



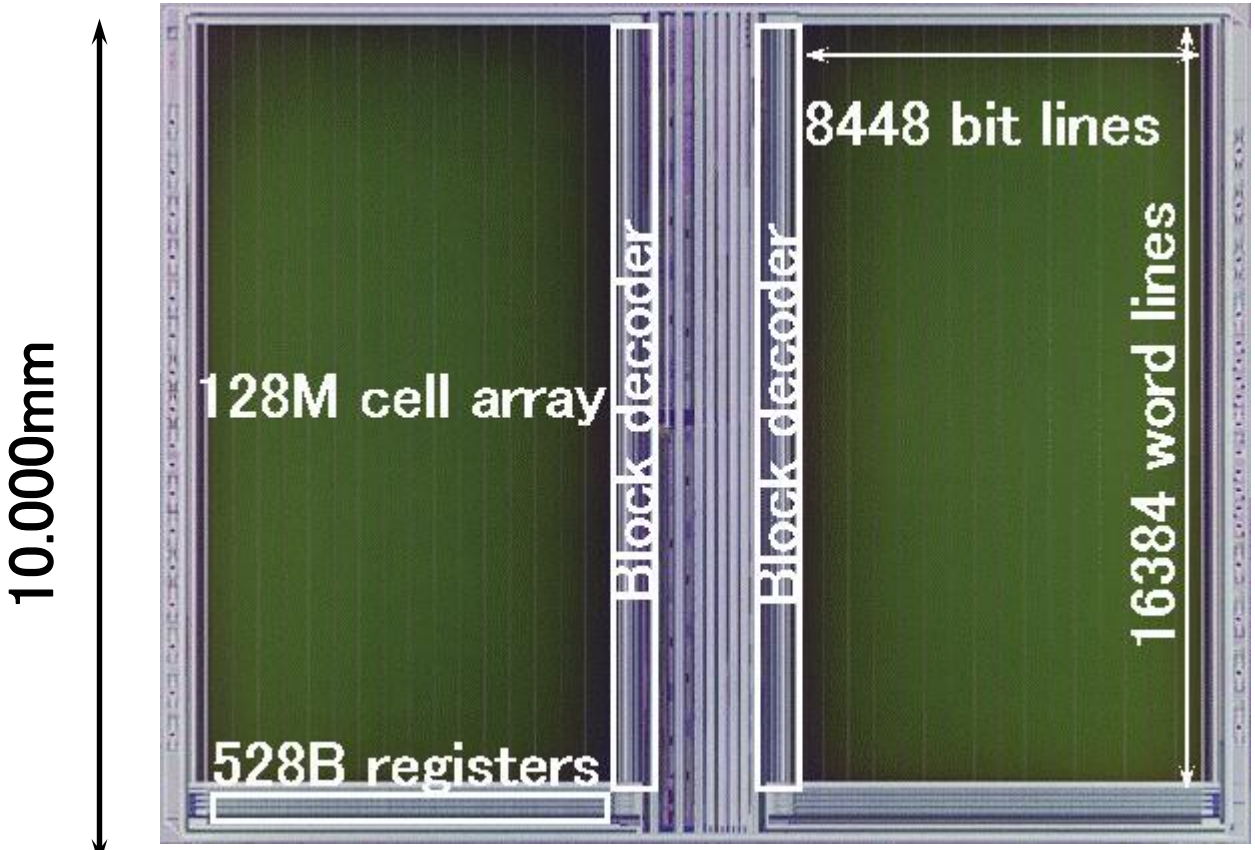
（ａ）初期状態

（ｂ）書き込み状態

チャネルが出来て電流が流れる

チャネルが出来ず導通しない

256M-NAND型ﾌﾗｯｼｭのﾁｯﾌﾟ写真

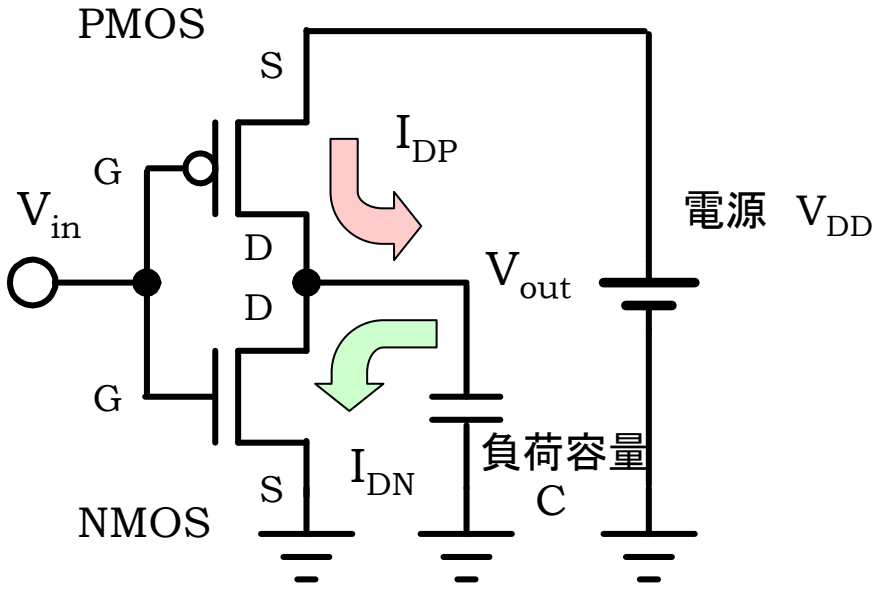


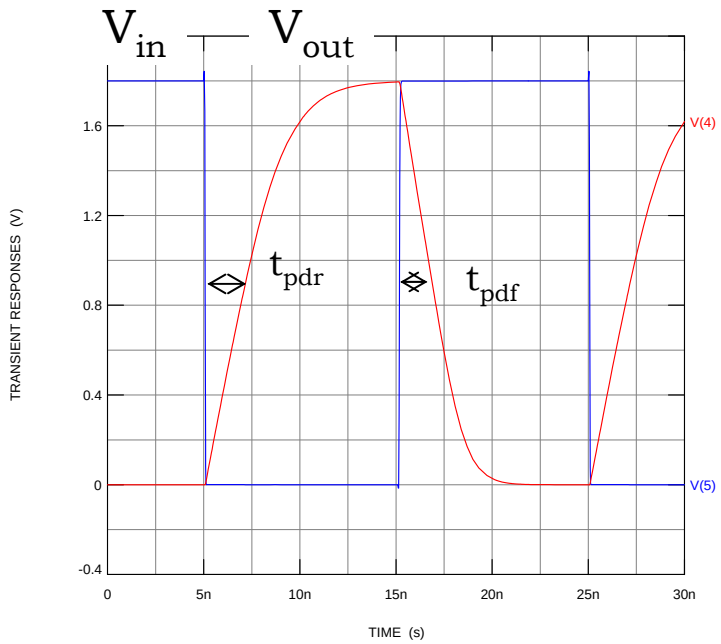
10.000mm

12.976mm

スケーリング則と微細化の進歩

信号遅延時間





立ち上がり時：PMOSがオン、NMOSがオフ。負荷容量にPMOSのドレイン電流I_{DP}が流れる

$$V_{out} = \frac{Q}{C} = \frac{I_{DP} \cdot t}{C}$$

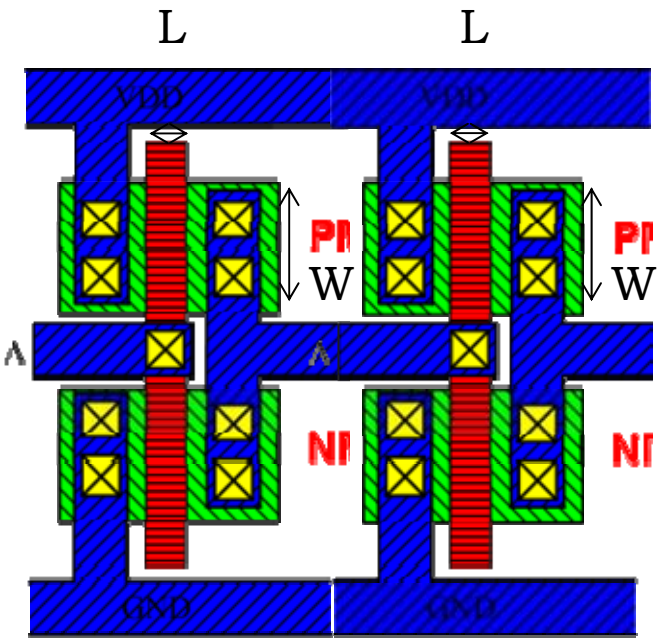
立ち上がりの信号遅延時間t_{pdr}はV_{out}がV_{dd}の半分の電圧になる時間

$$t_{pdr} = \frac{CV_{out}}{2I_{DP}}$$

同様に立ち下がりの信号遅延時間t_{pdf}は、

$$t_{pdf} = \frac{CV_{out}}{2I_{DN}}$$

CMOSゲートの遅延時間



$$T_{pd} \approx \frac{CV_{DD}}{2I_D} \qquad C = C_{ox}LW = \varepsilon\frac{LW}{T_{ox}}$$

$$I_D \approx KC_{ox}W\left(V_{GS} - V'_T\right) \qquad C_{ox} = \frac{\varepsilon}{T_{ox}}$$

$$= KC_{ox}W\left(V_{DD} - V'_T\right)$$

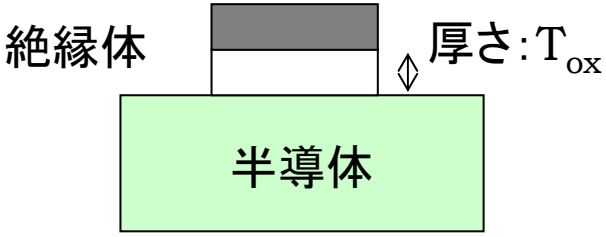
K:比例定数

$$T_{pd} \approx \frac{CV_{DD}}{2I_D} = \varepsilon\frac{LW}{T_{ox}}\frac{T_{ox}V_{DD}}{\varepsilon KW\left(V_{DD} - V'_T\right)}$$

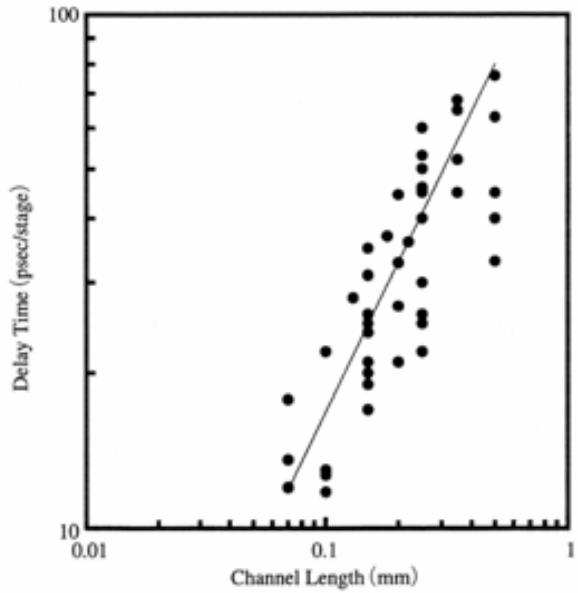
$$= \frac{L}{K\left(1 - \frac{V'_T}{V_{DD}}\right)}$$

次段のインバータは容量に見える

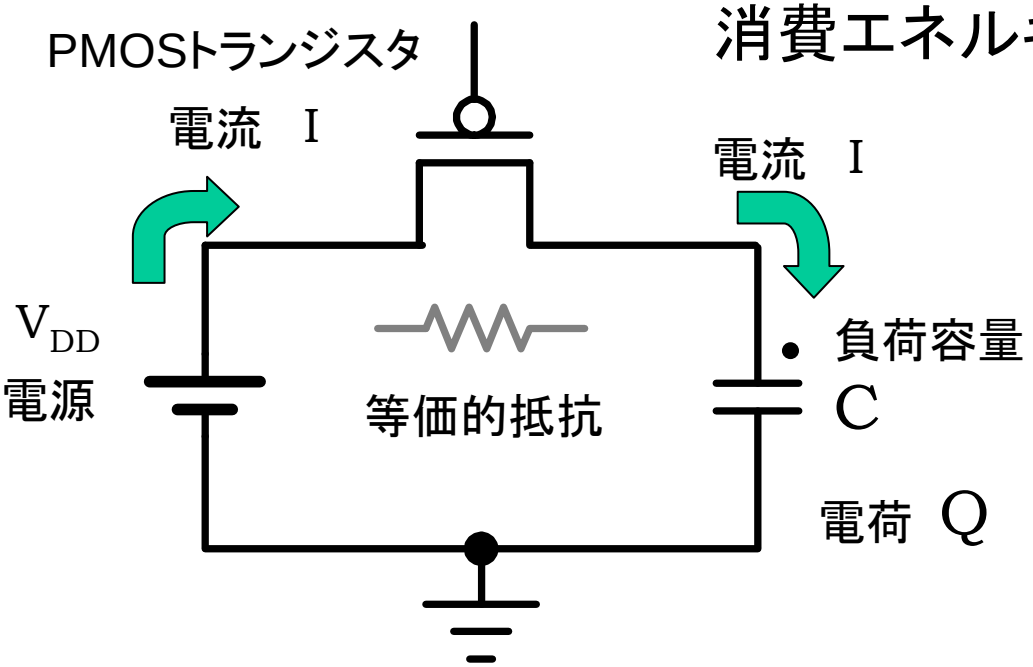
ゲート容量　　ゲート(金属)



$$T_{pd} \approx \frac{L}{K\left(1 - \frac{V'_T}{V_{DD}}\right)}$$



消費エネルギーと消費電力



1回のスイッチングでのエネルギー消費E_tは

$$E_t = CV_{DD}^2$$

消費電力P_dは1秒あたりのスイッチング回数をf_sとして

$$P_d = f_s E_t = f_s CV_{DD}^2$$

PMOSスイッチがオンすると、電源VDDから電流Iが流れ負荷容量Cを充電する。

このときに負荷容量に貯まった電荷Qは

$$Q = CV_{DD}$$

電源から回路に注入された電気エネルギーE_tは

$$E_t = QV_{DD} = CV_{DD}^2$$

負荷容量に貯まった電気エネルギーE_cは、

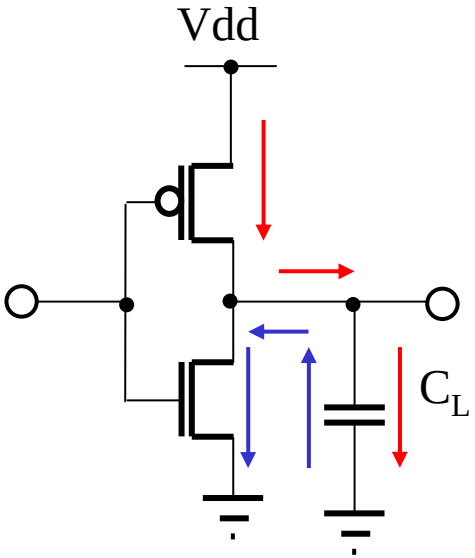
$$E_c = \frac{1}{2}CV_{DD}^2$$

したがって、PMOSの等価抵抗で消費されたエネルギーE_Rは

$$E_R = \frac{1}{2}CV_{DD}^2$$

負荷容量に蓄積されたエネルギーも立ち下がり時に消費されるので、E_tのエネルギーが消費される

消費電力



CMOS回路の消費電力

$$P_d \approx \underline{fC_L V_{dd}^2} + \underline{I_{leak} V_{dd}}$$

容量のスイッチング電力

これは従来あまり大きくなかった
今後は影響が大きい

消費電力を下げる

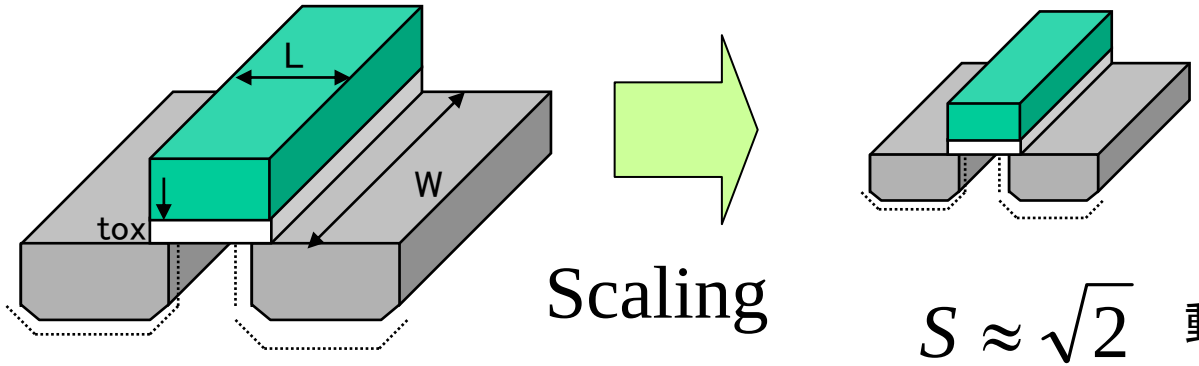
- 動作周波数を下げる
- 容量を下げる
- 電源電圧を下げる

CMOS回路の優れたところ

- 定常電流が流れない
- 駆動電流を上げて速度を上げても消費電力は増加しない

LSI技術の黄金則：スケーリング則

トランジスタの縦横の寸法と動作電圧を一定比率で縮小する



$S \approx \sqrt{2}$ 動作電圧も1/Sにする

デバイスと回路のパラメータ	Scaling Factor
寸法： L, W, Tox	1/S
不純物濃度	S
電圧	1/S
電界	1
電流	1/S
回路遅延時間	1/S
消費電力（デバイス１つあたり）	$1/S^2$

微細化・低電圧化により、

- 高密度化(低コスト)
- 高速化
- 低消費電力

が同時に達成される

スケーリング則の検証

・遅延時間

$$\tau_{pd} \propto \frac{C_L V_{ds}}{I_{ds}}$$

$$C_L \approx C_{gs} \propto \frac{LW}{T_{ox}} \rightarrow \frac{\left(\frac{L}{S}\right)\left(\frac{W}{S}\right)}{\left(\frac{Tox}{S}\right)} \rightarrow \frac{1}{S}$$

$$T_{pd} \approx \frac{L}{K\left(1-\frac{V'_T}{V_{DD}}\right)} \rightarrow \frac{1}{S}$$

・規格化消費電力=消費エネルギー

$$P_d \approx fC_L V_{dd}^2$$

$$E_d = C_L V_{dd}^2 \quad \text{（消費エネルギー）}$$

$$E_d = C_L V_{dd}^2 \rightarrow \frac{C_L}{S}\left(\frac{V_{dd}}{S}\right)^2 \rightarrow \frac{1}{S^3}$$

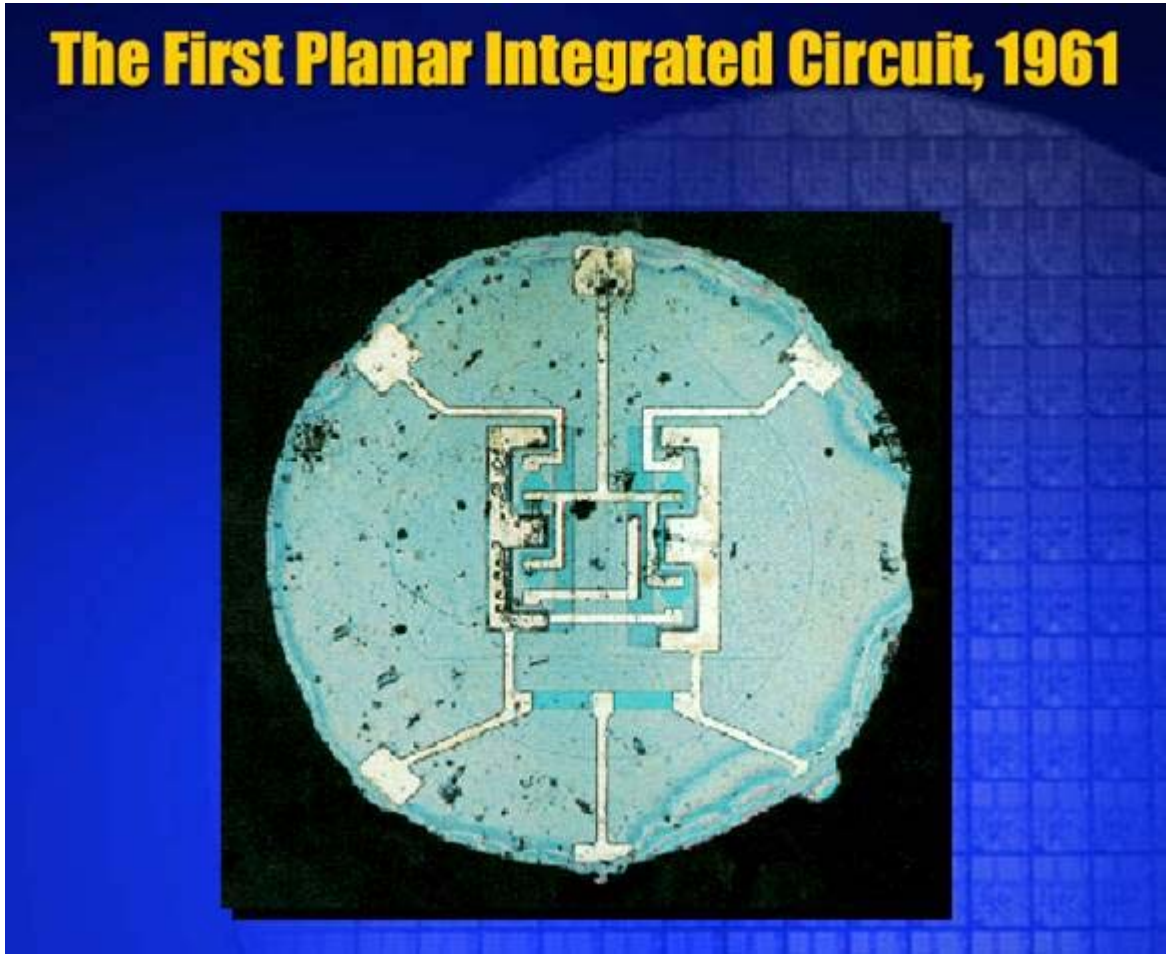
消費エネルギー:
スケールファクターの3乗に反比例する。
しかし実際は配線容量があまり下がらないので
S^2程度になる。

$$T_{pd} \approx \frac{T_{pd}}{S}$$

遅延時間:
スケールファクターに反比例する。

最初の集積回路

最初の集積回路はトランジスタ4個程度を集積した簡単なものであった。

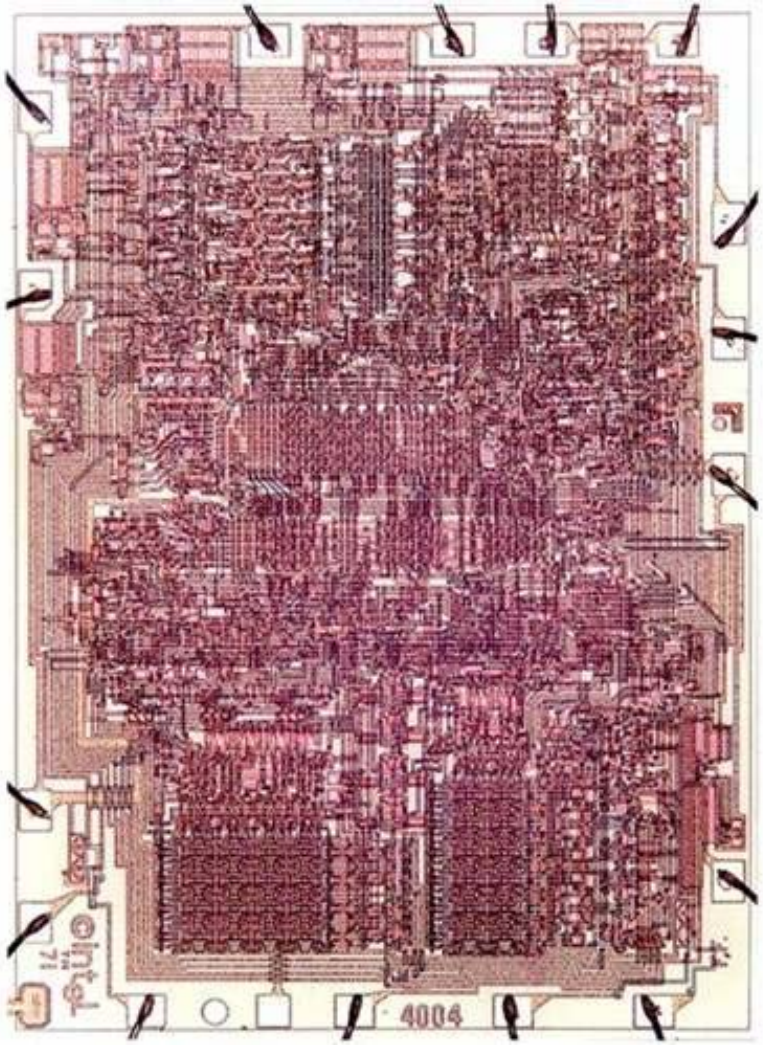


Gordon E. Moore, ISSCC 2003.

世界最初のマイクロプロセッサ

(http://www.intel.com/intel/museum/25anniv/hof/hof_main.htm)

世界初のマイコンはトランジスタ数　2000個程度の簡単なものであった。
現在は1億個を集積する



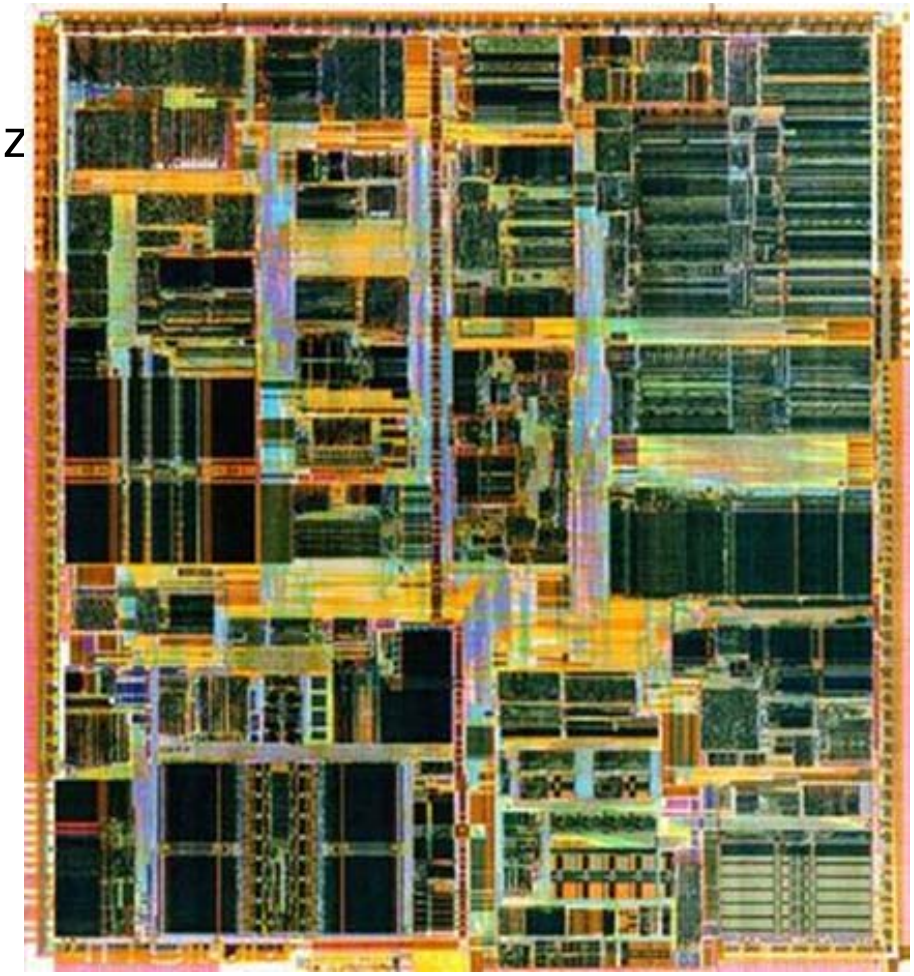
- Intel 4004 (1971年)
  - 動作周波数：108KHz
  - バス巾：4ビット
  - プロセス技術：10um
  - トランジスタ数：2300
  - メモリ：640バイト

最近のマイクロプロセッサ

(http://www.intel.com/intel/museum/25anniv/hof/hof_main.htm)

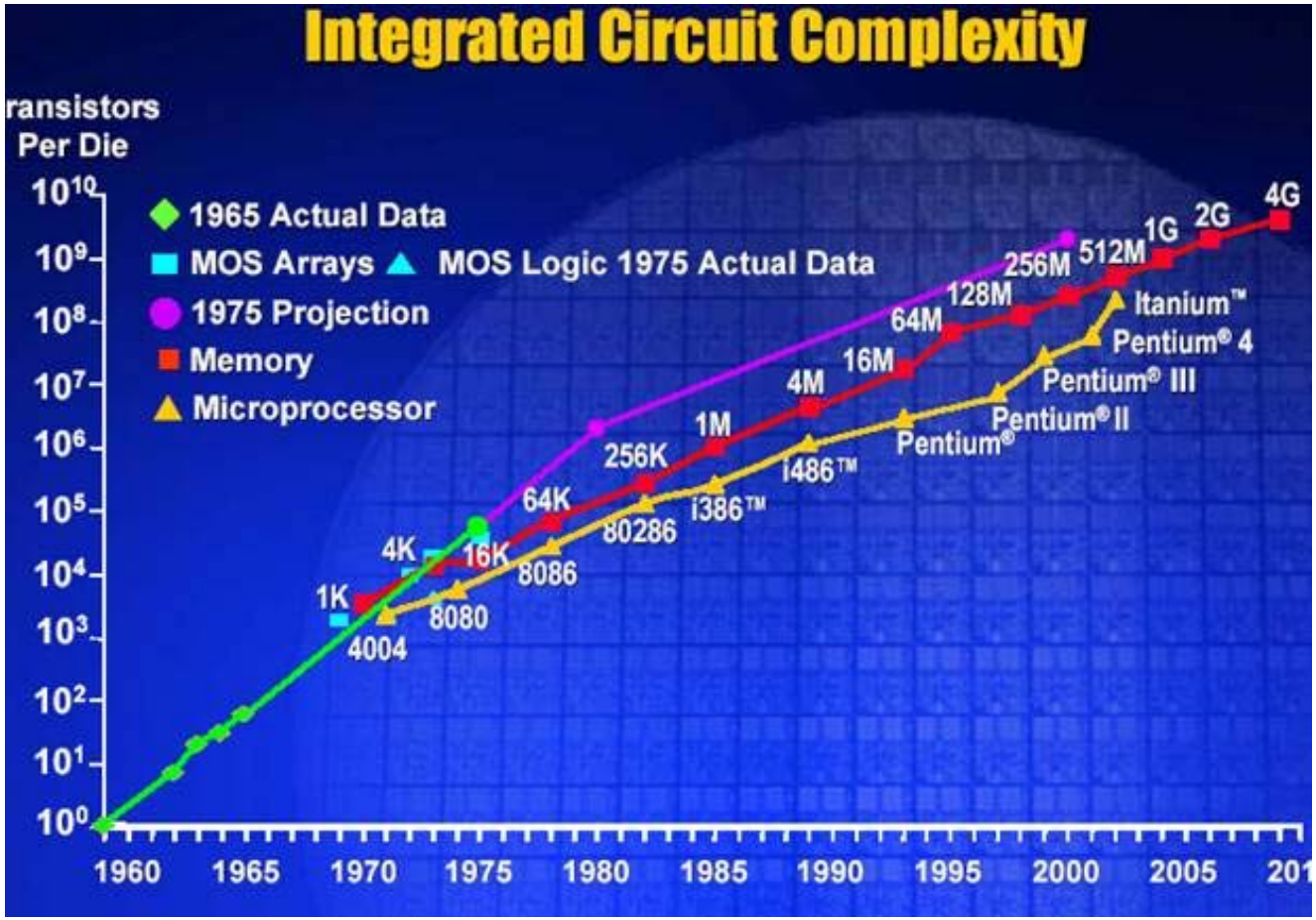
- Pentium II (1997年)
  - 動作周波数：233～300MHz
  - バス巾：64ビット
  - プロセス技術：0.35um
  - トランジスタ数：750万
  - メモリ：64Tバイト

- Pentium II (1998年)
  - 動作周波数：450MHz
  - プロセス技術：0.25um
  - トランジスタ数：750万



集積度の推移

・チップに集積されるトランジスタは数億個レベルになった
・30年間で6桁上昇した　　年率60%アップ, 3年で4倍



Gordon E. Moore, ISSCC 2003.

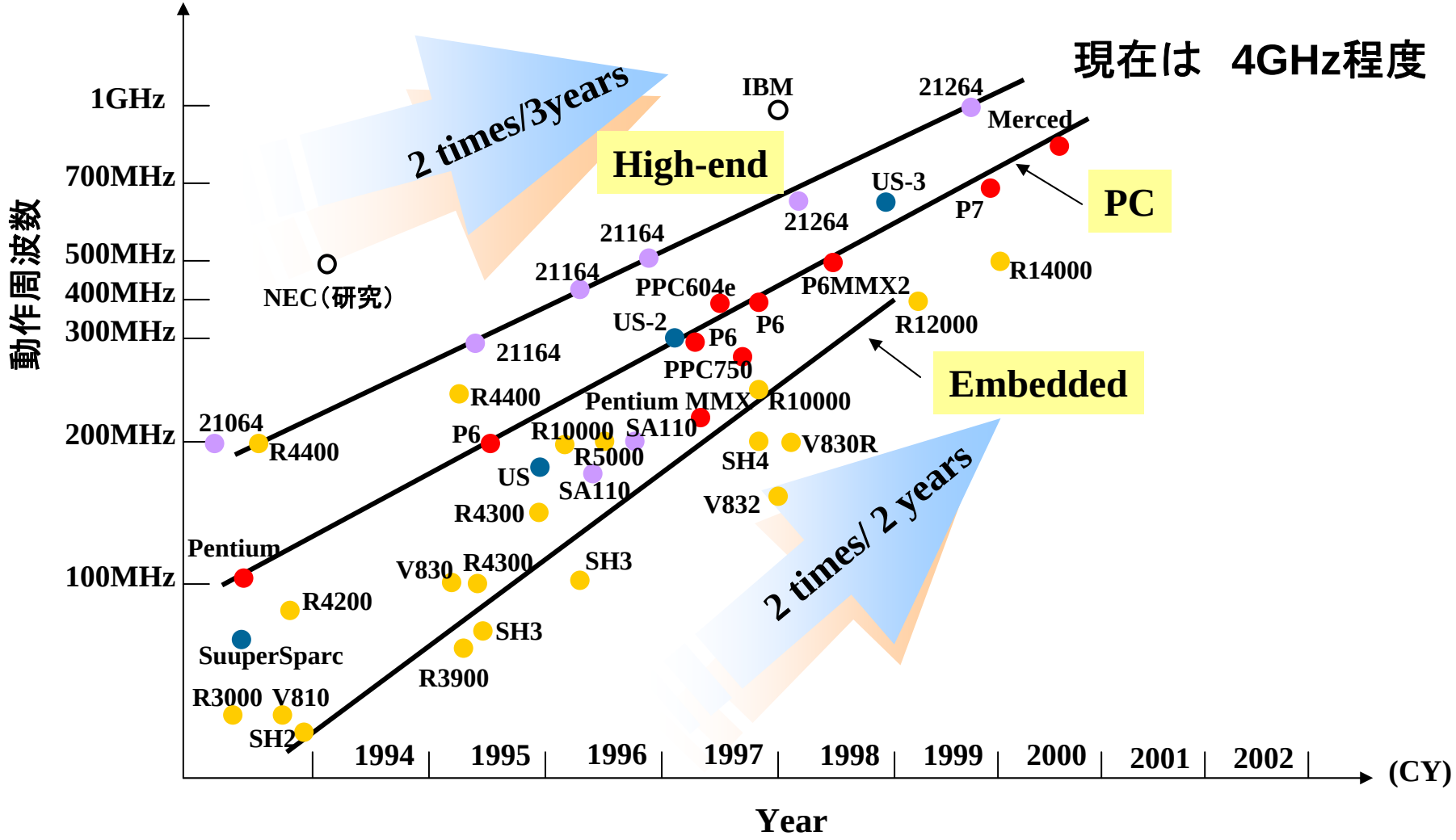
トランジスタコストの推移

・トランジスタコストは30年間で6桁減少した。

Gordon E. Moore, ISSCC 2003.

動作速度の向上

微細化によりプロセッサの動作速度が向上



半導体売り上げの推移

・世界の半導体売り上げは76年から94年まで順調に伸び、２０兆円規模に成長した。

Gordon E. Moore, ISSCC 2003.